大阪市立大学大学院　都市系専攻
修士論文梗概集　2012 年 2 月

着地型観光におけるツアープログラムの形成過程に関する研究
―「OSAKA 旅めがね」におけるエリアコーディネーターの果たした役割に着目して―

都市計画分野　　藤原拓也

Abstract
近年、地域が主導となった着地型観光をまちづくりに活かす動きが広がっている。OSAKA 旅めがねは、地域に根ざした活動をする市民団体や、市民らが主体となって運営する着地型観光事業者であり、大阪市内でまちあるき型のツアープログラムを展開している。各エリアでは地元に根ざした活動をするキーパーソンが「エリアコーディネーター」となりツアープログラム作成や地域の関係者との調整を行った。本研究では、OSAKA 旅めがねを対象として、エリアコーディネーターの役割に着目して、着地型観光ツアープログラムの形成過程を把握した。その結果、形成過程の３つのパターンが見出されそれぞれについて、課題と可能性を整理することができた。エリアコーディネーターは地域側と来街者の両方視点を持ってツアープログラムづくりや関係調整を行っていることが明らかとなった。

１はじめに

（１）研究背景と目的

近年では観光ニーズの多様化、高度化により、本物のまちや住民の暮らしへの関心が高まっている。中心市街地の衰退の課題を抱える地域側にとっても、観光によって、交流人口を増やすことは、地域経済の活性化や地域環境の保全において有効となることから、各地で地域側が主体的に観光づくりを行う着地型観光が進められている。

大阪においては、地域に根ざした活動をする市民団体や、一般市民らが主体となって運営する着地型観光事業者である「OSAKA 旅めがね」が水都大阪２００９[(1)]をきっかけに発足した。現在、大阪市内１６エリアで地域に密着した着地型観光ツアーを実施している。

OSAKA 旅めがねでは、各エリアで地元に根ざした活動をするキーパーソンが「エリアコーディネーター」となり担当エリアのツアープログラム作成や地域の関係者との調整などを行っている。着地型観光事業を自律的に継続して運営していく上では、ツアーが地域に寄与する視点と、採算性を確保する視点の両方が必要であり、地域、参加者にとって魅力的なツアープログラムが求められる。そのため、地域のキーパーソンとしてツアープログラムを作成するエリアコーディネーターの役割は重要である。

図１　ツアーの様子

図２　着地型観光の概念

（２）研究目的

本研究では、OSAKA 旅めがねを対象として、エリアコーディネーターの役割に着目して、着地型観光ツアープログラムの形成過程を把握する。その過程から、各エリアにおける観光プログラムの成り立ちについて考察し、魅力的な観光プログラムを形成する上での観光事業者の役割を明らかにすることを目的とする。

（３）研究方法

本研究では、着地型観光の意義について述べたうえで、OSAKA 旅めがねを事例として取り上げ、事業の運営体制の形成過程を把握する。形成過程において、各エリアにおけるキーパーソンが着地型観光事業を通じてビジョンを共有し、各エリア個別の取り組みがはじまった経過について明らかにする。次に、ツアープログラムの内容を把握・分析する。そのうえでエリアコーディネーターへのヒアリング調査から、ツアープログラムの形成過程を把握し、形成過程においてエリアコーディネーターが果たした役割について考察を行う。

（４）研究の位置づけ

本研究に類似する研究として、観光の対象となる地域資源に着目した研究として、西江[4]の研究では、密集市街地において、地域内外者の視点から地域の魅力資源を明らかにし、その共有化を図っている。今井らの研究 2）では、観光ボランティアガイドに着目し、そのガイドルートを分析することで、効果的な観光資源のルート化について考察した。これらの研究では、

地域住民やまちの使い手の視点から地域資源を見出す方法について明らかにしている。次に、観光の形成過程と地域住民との関係に関する研究として、森重[3]は北海道標津町の地域づくりを対象に観光の導入プロセスと地域関係者の関係性の変化について分析を行い、地域づくり持続するうえでの、観光を通じた地域の関係者ネットワーク構築の必要性を説いている。本研究の特徴として着地型観光の事例を対象に、関係者ネットワーク形成の過程および、地域資源のツアープログラムまでの形成過程に着目している。

１着地型観光

（１）着地型観光の定義

着地型観光とは「旅行・観光の目的地である各地域側が有する個別の観光資源に関する情報やその土地ならではの文化や産業の体験、交流など着地の人々の視点を重視して企画・立案・実施されるもの」[2]をいう着地型旅行商品を企画・実施していくためには地域全体が支え、育てていく仕組みが必要で、それを実践・持続していく組織が求められる。

図３　形成プロセス

（２）着地型観光形成プロセス

着地型観光づくりでは、ツアーを作り出す組織作りの段階、地域内の多様な関係者のネットワーク形成の段階とそれらの多様な関係者によって地域の資源を発掘し、ツアープログラムを形成する段階に整理できる[3]（図３）

２ OSAKA 旅めがね事業の概要と運営体制

（１）事業の概要

OSAKA 旅めがねは水都大阪 2009　におけるクルーズ＆ウォーク事業（以下 C&W 事業と表記）を前身として設立し、現在、民間事業者３者による共同事業体が事務局を担う。市民団体や市民ガイドが参加し、地域コミュニティに寄与した、民間ベースで自律した着地型観光事業を目指す。水都大阪 2009 終了後も継続実施しており、 2011 年７月までの各エリアのツアー参加人数と催行率（実施回数／販売数）を示した（図５）。

表１　事業概要

実施内容	プロガイドである地元案内人による体験・交流型のまちあるきツアー
プログラム数	大阪市内１６エリア１７コースの定期プログラムおよび期間限定のプレミアムツアー
運営主体	OSAKA旅めがねコンソーシアム（３社共同事業体） [株式会社インプリージョン（代表：小田切 聡）、有限会社ハートビートプラン （代表：泉 英明）、山根エンタープライズ株式会社（代表：山根 秀宣）]
旅行業態	第３種旅行業（国内企画募集型旅行）
事業コンセプト	①「地域に根ざしたイメージや魅力を伝えることで、リアルで新しい大阪のイメージを伝える」 ②「エリア案内人を通して地域の人と来街者の交流をつくる」 ③「事業を継続することで地域の新しい産業とし、地域のコミュニティを元気にする」
実施期間	・プレ実施期間：２００９年４月２５日～８月１６日（土日祝日） ・水都大阪２００９期間：２００９年８月２２日～１０月１２日（土日祝日） ・継続実施期間：水都大阪終了後～現在（２０１２年２月時点）（土日祝日）
販売方法	申し込み：事前申込制 販売窓口：インターネット（ウェブサイト：http://tabimegane.com/ ）電話 旅行会社、ホテルとの提携
販売価格	３４８０円（水都大阪２００９期間以前は２９８０円）

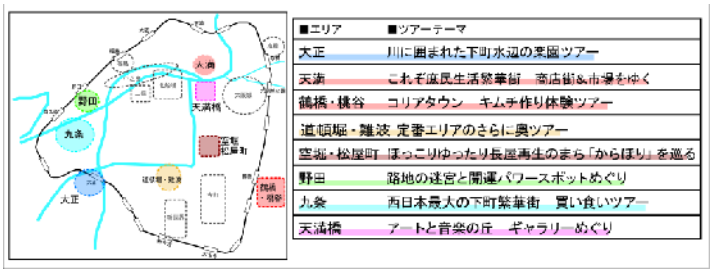

図４　実施エリア

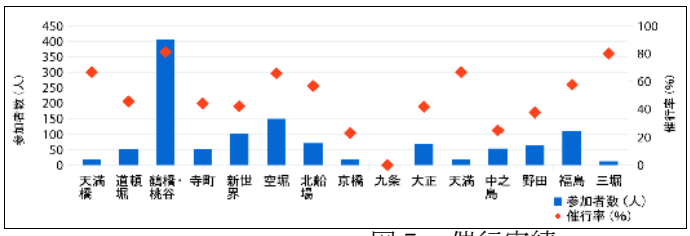

図５　催行実績

（２） C&W 事業の実施過程

表、事業コンセプトが決定した企画構想期、各エリアのコースが検討されたツアープログラム形成期、水都大阪 2009 以後は移行期、継続実施期に分けられる。

（３）運営体制

主体の位置づけを明らかにし、各期間における役割を示した。

■事務局

市民参加準備会議に参加した団体から、事業の全体構想における基本的な考え方を固めることを目的にコアメンバーが選定された。事業の目標設定や、基本的な考え方の整理にあたっては、２００８年３月～５月にかけて、事業のビジョンを共有しながら実施計画を策定。水都大阪２００９後、運営主体が（コアメンバー）３者共同事業体へ引き継がれた。

■エリアコーディネーター

企画構想期において様々な地域に根ざした市民活動を行う団体（表）などから各エリアのキーパーソンが集められた。事務局メンバーとビジョンを共有しながら、実施計画策定に関わった。その後、コーディネーターと事務局がツアープログラム開発を行った。

■エリアクルー

エリアクルー（市民ガイド）は、知識を伝えるのではなく、地域住民とツアー参加者をつなぐ役割をもつ。市民サポーターとして一般公募が行われた。旅程管理者の資格取得し、プロガイドとして活動するガイドであり、活動に対しては金銭報酬が与えられる。

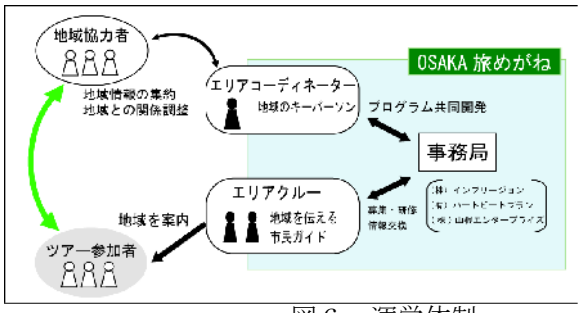

図６　運営体制

（４）小結

OSAKA 旅めがねの運営体制の設立過程を把握した。設立過程において、各エリアでまちづくり活動などをしていたキーパーソンが集まり、事業の企画構想、コース作成に関わることでネットワークがつくられた。OSAKA 旅めがねは各エリア個別の活動や、まちあるきを自律運営型の着地型観光事業とすることが事業の目標であった。そこで事業を各エリアで展開する上でコーディネーターは、地元のネットワークを持ち、エリア内の関係者を巻き込み、ツアーの協力体制を築き、調整をし、ツアープログラムを開発する主体として位置づけられた。

３ツアー実施エリアとツアープログラムの把握

OSAKA 旅めがねにおける各エリアのツアープログラムを把握した。観光資源を把握した上で、ツアープログラムにおいて扱われている観光資源やツアー行動の分析を行い、その傾向を明らかにした。

・ツアープログラムの傾向

観光資源は飲食店、物販店、歴史資源や史跡、自然・土木・建築物などの空間構成要素のいずれも扱っている。観光行動に関しては各エリアで「試食」「人物紹介」の項目は必ず含まれており、「体験・交流型」のプログラムであることがわかる。他にも、クルーズなどの体験が含まれることがある。

表２　ＡＣ所属団体

団体名	もう一つの旅クラブ	からほり倶楽部「空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト」
AC	大正、野田	空堀
組織形態	ＮＰＯ法人	任意団体
活動エリア	設けていない	空堀地区
活動内容	・大阪の都市の価値・魅力を文化歴史の観点から告知・普及しまちづくり活動に貢献する活動の企画実施、調査業務の受託、情報提供、会議への参加、提言活動など ・「大阪まち遊学」（2007～）はまち歩きによる旅人の視点でのまちの魅力発掘・発信するツアープログラム ・「北浜テラス」、「川の駅にぎわい施設」整備、水辺空間の活用事業、「ご来光カフェ」など	活動目的１．美しく歴史のあるまちの保存・再生、２．イキイキした活力あるまちづくり、３．新旧世代・文化の共生 建築物の借り上げ、テナント誘致による歴史的建築物の再生「練」（2003・御屋敷再生複合ショップ）「萌」（2004・複合文化施設）「縁」（2005・レストラン） ・アートイベント「からほりまちアート」による地域の魅力発信
団体名	野田まち物語	九条下町ツアー
AC	野田	九条
組織形態	任意団体	任意団体
活動エリア	野田・安治川界隈	九条、川口周辺
活動内容	地域の魅力のプロモーション、地域内外の交流を生み出す。 会員の専門性と興味を活かした商品開発７つのテーマの活動。 2008年ごろより野田の地蔵にまつわる言い伝えをもとに「ななとこまいり」をテーマにしたまちあるきやマップ作成。	大阪ドーム完成をきっかけに、来訪客を九条地域へ呼び込むことを目的に九条ＡＣと地域で商店などを営む同級生らがによる町おこしの活動。九条ＡＣが以前旅行会社に勤務していたことからのボランティア活動として地域をめぐるツアーを実施。修学旅行、体験学習の受入れ。

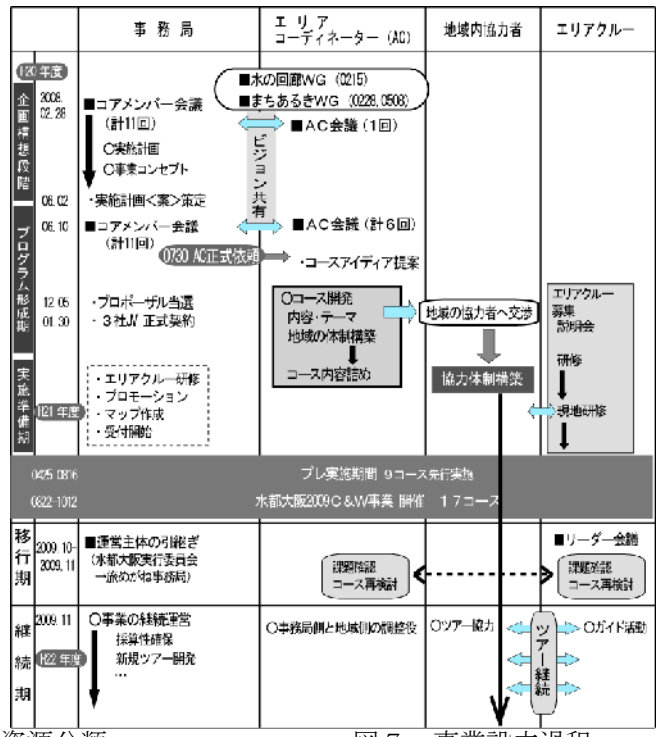

図７　事業設立過程

表３　ツアー行動分類

行動分類	大正	道頓堀・難波	鶴橋・桃谷	空堀・松屋町	野田	九条
体験			1			
人物紹介	3	1	4	5	2	5
試食	3	3	5	1	2	4
土産	1	1		2		
クルーズ		1				
寺社参拝		1	1	1	10	

表４　観光資源分類

資源分類（個）		例	大正	道頓堀・難波	鶴橋・桃谷	空堀・松屋町	野田	九条	計
店舗	店舗－物販	食品、雑貨店	3	2	8	1	3	6	23
	店舗－飲食	飲食店、居酒屋	4	20	4		1	2	31
	店舗－サービス	銭湯、旅館	2	2	1				5
	ギャラリー、文化施設	映画館、劇場		2		3		2	7
	事業所	事務所、工房	1		2	1			4
歴史的要素	寺社	神社、地蔵		1	2	1	8		12
	史跡	石碑	1	1	1			1	4
空間的要素	土木構造物	道路、鉄道、橋	5	1	3	1	7	2	19
	商店街、市場	市場	1	2	2	2	1	5	13
	自然要素、地形	坂道、河川	1			3		1	5
	建築物	長屋、近代建築	1			6	5	1	13
その他	その他	アート作品	1	1			1	1	4
資源個数（計）			20	32	23	18	26	21	140

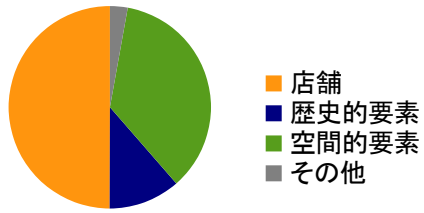

図８　観光資源内訳

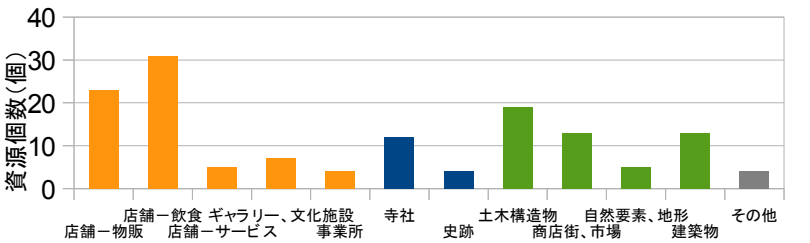

図９　観光資源個数

４ツアープログラム形成過程の把握

（１）調査の概要

９エリア、７名のエリアコーディネーターを対象とし、ツアープログラムの形成過程を把握することを目的として、ヒアリング調査を行った。調査の概要を表５に示す。

表５　調査対象

調査対象者	調査実施日
大正、天満ＡＣ	２０１１年6月２８日、２０１２年1月１１日
難波・道頓堀、鶴橋・桃谷ＡＣ	２０１１年１２月２１日
空堀・松屋町ＡＣ	２０１１年１１月４日
野田ＡＣ	２０１１年１２月１９日
九条ＡＣ	２０１１年１１月２１日
天満橋ＡＣ	２０１１年月日１１月８日

（２）調査結果

ヒアリングの内容は、

①エリアコーディネーターとツアー実施エリアとの関わりについて

②ツアープログラムにおけるテーマの設定と観光資源について

③ツアー実施状況の現状認識について、であった。

調査結果を表６にまとめた。

表６　調査結果

エリア	大正	天満	難波・道頓堀	鶴橋・桃谷
地元関係団体	川を生かした街づくり協議会 三泉商店街振興組合	大阪天満宮	地元商店街	ー
エリアコーディネーターとエリアのかかわり方	・平成１５年に水辺の社会実験リバーカフェ事業 平成１６年度、１７年度には、大正区において町会や地元住民が参加する会議でまちづくりコンサルタントとして関わる ・まち遊学にて大正を案内するコースをつくった	・地元に住んでおり、勤務地である ・毎日通っていてなじみある	・道頓堀スタジオジャパンという会社で地域にお客さんを呼んで地域のブランド価値を高める活動 ・旅行企画会社での観光ツアーの企画	・旅行企画会社での観光ツアーの企画 ・大手旅行会社のツアーへオプションメニューとしてツアーを販売
ツアープログラム形成過程	・２００７年大正ＡＣが理事長を務めるＮＰＯの「まち遊学」にて大正エリアのまちあるきコースを作成 ・歴史、水辺遊び、商店街が水辺のテーマでつながる ・ツアー作りにあたり、三泉商店街の役員から商店街関係者を紹介	・関係者のネットワークができる人材がＡＣの知り合いにいたことからツアーを作った ・「まち遊学」でのツアーづくり ・地域情報誌「天満人」をつくるIさん、天神祭の役員Kさん	・難波、鶴橋、新世界エリアは有名観光地 ・水都大阪イベントにあわせて全国的にも名の通った有名観光地も取り入れるべき ・有名観光地でも、地元の案内人によって一歩踏み込んだ、知らないところを知ってもらう、大阪の知られていない魅力を伝える ・地元の案内人により、繁華街でも住民の生活があることを知ってもらう	
ツアー実施後現状・課題	・商店街組合、川を生かしたまちづくり協議会などの関係団体間では連携は無かった ・ツアーで紹介する観光資源は当初から変更していない	・催行回数が少なくツアーテーマを変更 ・まちの人はそんなに気にしていない ・クルーの藤堂さんが新たなテーマでツアー開発	・インパクトを与えられていない ・参加者からの要望を聞き、場合によっては紹介する場所を増やすこともある。ツアーで案内している施設対応に変化が見られているところがある	・エリアクルーは新規開店が多く新たな店が開店するとあいさつに行きツアーの新たな紹介に加える場合もある ・エリアクルーは定期的に買い物を目的に利用、地域協力者とのコミュニケーションを保っている

エリア	空堀	野田	九条	天満橋
地元関係団体	からほり倶楽部（ＡＣ所属）	野田まち物語（ＡＣ所属）	九条下町ツアー（ＡＣ所属）	北大江まちづくり実行委員会
エリアコーディネーターとエリアのかかわり方	・からほり倶楽部での活動 ・長屋再生のテナント誘致やアートイベントなど ・からほり倶楽部ではアミューズメント目的のまちあるきは引き受けなかった	・野田ＡＣは「野田まち物語」「もうひとつの旅クラブ」から２名が担当 ・２００７年から始まった「まち遊学」で野田を案内するコースを作った ・出身が野田で、地元にネットワークがある	・生まれも育ちも九条 ・１０年以上「九条下町ツアー」の取り組み修学旅行生一般客のツアーの実施１００回以上、３０００名以上参加者実績 ・同級生らが経営する商店街の店めぐりをする町おこしの活動	・北浜に１０年、事務所を構え紳士服業 ・既製服屋の取引先があり、訪問する機会が多く、主な仕事場 ・コントラバスを演奏しており、地区の楽器屋に知り合いがいる。 ・ギャラリーめぐりツアーを実施
ツアープログラム形成過程	・2003年7月、からほり倶楽部メンバー有志が、聞き込み調査や地域の資源を発掘し、店舗や住民などの協力を得て、空堀地区の魅力資源や地域情報、まちあるきコースを掲載した「からほり絵図」を発行 ・観光資源とテーマは以前から配布していた「からほり絵図」に掲載 ・ツアープログラムのテーマは「長屋再生のまち」であり、からほり倶楽部が再生を手がけた「練」「萌」「惣」がプログラムの主要な来訪スポット	・地元のネットワークを持っていたため、もうひとつの旅クラブが行う２００７年大阪まち遊学にて路地・長屋のまちをテーマに野田エリアを案内するツアーコースを開発 ・「野田まち物語」では野田に伝わる伝統に由来した７つの地蔵めぐり「ななとこまいり」をテーマにした商品の開発、まち歩きを実施 ・二者それぞれが取り組むテーマでツアーの提案 ・長屋・路地をテーマに提案したツアーに修正をしながらななとこまいり」を組み込む形でコースが完成	・ツアー事業の継続のためにボランティアベースから企業ベース、ビジネスベースに乗せる必要性を認識してＡＣに就任 ・OSAKA旅めがねと九条下町ツアーはほぼ同じ内容の商店街の食べあるき、下町体験ツアー ・商店街や行政機関からの補助金は一切受けておらず、実費のみの金銭のやり取り ・補助を貰うと公平性の面ですべての店舗を紹介しなくてはならない。商店街は協力してくれる関係にあるが支援は受けない ・ツアープログラムの質を確保、自由に店の選択が出来る関係	・天満橋エリアのギャラリー巡りツアーをした。イベント・文化仕掛け人学校で、５期生が卒業した頃、２００名にハガキ出してツアー募集・実施 ・事務局からは、北浜含めて東西方向のコースが欲しいということでエリアコーディネーターの依頼作成に当たり、知り合いとなった大阪市都市整備局のＭさん、ギャラリーのＫさんは地域に詳しく、地元に人的ネットワークを持つ人物ＡＣで提案したというより、Ｍさん、Ｋさんと一緒にツアープログラムを作った ・Kさんの紹介で、天満橋のギャラリー関係者の協力を得た
ツアー実施後現状・課題	・地域住環境の破壊、観光公害の懸念 ・からほり倶楽部はOSAKA旅めがねのツアーに対して、協力（ツアー中での人物の紹介など）は行うが、連携や一体的な活動は行っていない「つかずはなれず」の関係 ツアーで通り抜ける路地２箇所において、OSAKA旅めがねが町会の許可をもらっている。	・水都大阪２００９事業以降、催行回数２１回、催行率37.5% ・長屋と地蔵では訴求力に欠ける。中央卸売市場を案内、市場の中を見学、商店の試食・買い物、ケーキを試食など新プログラム ・路地の許可を取っていない。苦情は今まで一度もない。地域の人からの評価、まちあるきに区別ない。	・OSAKA旅めがねと九条下町ツアーはほぼ同じ内容の商店街の食べあるき、下町体験ツアー	・水都大阪２００９イベント以降、ツアーの催行回数が４回と少なく、現在はツアーを行っていない ・天満橋ＡＣは地域とのかかわり方を広げている。Ｍさんを通じて北大江まちづくり実行委員会に繋がり、「北大江たそがれコンサート」の関係者に楽器店の人を紹介

（1）形成手順

必要条件を整理、テーマ、資源、費用、人物紹介

（2）ツアープログラムの形成過程

ヒアリング調査の結果より、ツアー形成要因の類型化をした結果、ツアープログラムの形成過程については３つのパターンが見出せた（図１０）。

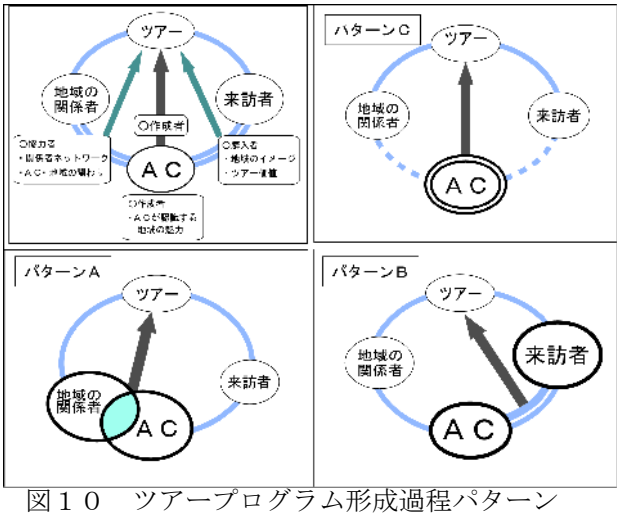

図１０　ツアープログラム形成過程パターン

○パターンA

【該当エリア】

空堀・松屋町エリア、野田エリア、九条エリア

【特徴】エリアコーディネーターは各エリアにおいて、地域関係者とともに始めた地域に根ざした活動を行っていた。協働しておこなっていたまちづくり活動がツアーの発端となっている。

【エリアコーディネーターの役割】

・地元まちづくり団体と観光事業者との調整を行っている。地元まちづくり団体との距離が近いために、地元に精通したエリアコーディネーターによる地元まちづくり団体、観光事業者間の関係調整が不可欠である。

・まちづくり活動のプロモーション活動として観光を取り入れている。野田、空堀エリアでは、ツアープログラムにおいて、OSAKA 旅めがねツアーのテーマと地元のまちづくり団体の活動テーマを合わせており、ツアー中で地域オリジナル商品を取り込むなどの工夫をしていることがわかる。このような地元まちづくり団体の活動と OSAKA 旅めがねでのツアーでのテーマのすり合わせや、観光資源の紹介がエリアコーディネーターが果たした役割であるといえる。

○パターンB

【該当エリア】

道頓堀・難波エリア、鶴橋・桃谷エリア、天満エリア

【特徴】対外的要因によってツアープログラムが決まる。「定番のさらに奥ツアー（道頓堀・難波エリア）」「コリアンタウン　キムチ作りツアー（鶴橋・桃谷エリア）」など、まちのイメージとツアーの打ち出すイメージが一致する「有名性、看板性」が見られる。また、ツアーの価値のわかりやすさ（例：体験、スイーツ付き、クルーズなど）を打ち出していた。

【エリアコーディネーターの役割】道頓堀・難波エリア、鶴橋・桃谷エリアでは、OSAKA 旅めがね以前から旅行企画会社でツアーを行っていた。商品としての価値を高める視点ツアープログラムをプロデュースする視点が必要である。野田エリアでは、ツアーの売れ行き不振に伴い、コースを変更がされた。「中央卸売市場に入れる」「スイーツ付き」という価値を高める要素が加わっている。

○パターンC

【該当エリア】大正エリア、天満橋エリア

【特徴】テーマ先行型でツアープログラムが形成されてきたといえる。形成過程としては、テーマに沿った地域の観光資源の発掘や、関係者ネットワーク作りをしながらツアープログラムがつくられている。エリアコーディネーターは個人的に地域に通っていたりしたが、ツアープログラムにはエリアコーディネーター自身の趣向が反映されている。大正、天満橋エリアは今まで観光の対象として取り上げられなかったが、新たなまちに対する視点を提供しているといえる。

【エリアコーディネーターの役割】テーマ設定にあわせて、関係者ネットワークを作り、資源を発掘している。この形成パターンでは、エリアコーディネーターの趣向を反映した新しいテーマの設定で地域を捉えられ、新たなテーマをきっかけにして、地域内の関係者のネットワークができることが期待できる。

（3）小結　－　まとめと考察

ツアープログラム形成におけるエリアコーディネーターの役割を整理する。ヒアリング調査により、ツアープログラム形成過程を把握した。その結果、以下のことが明らかになった。

・エリアコーディネーターとエリアのかかわり方としてエリア内での活動やエリアコーディネーター自身が持っていた関係者のネットワークがツアーに反映されている。エリアコーディネーターは地域関係者、来訪者の両方を意識した視点を持つが、テーマ設定については、エリアコーディネーターと地域のかかわり方、活動が基盤となって設定される例（パターンA）、対外的なエリアのイメージを利用して作られる例（パターンB）、エリアコーディネーター自身のエリアに対する興味・関心が強く表れる例（パターンC）が見られた。それぞれのパターンについてエリアコーディネーターの役割や可能性は異なる。

５結論

本研究では、OSAKA 旅めがねを事例として、そのツアープログラムの形成過程においてエリアコーディネーターが果たした役割を明らかにすることを目的として、事業の運営体制の設立過程とツアープログラムの形成過程を把握した。

○ OSAKA 旅めがね事業の経緯とエリアコーディネーターの位置づけ

OSAKA 旅めがねでは、事業の趣旨として地域のコミュニティに寄与し、事業を継続するために自律的な運営をすることを目標とした。事業の構想段階における、企画構想期において、各エリアでまちづくり活動などをしていたキーパーソンが集められ、ビジョンを共有し、事業を行う事務局と各エリアでの活動を行う関係者のネットワークがつくられた。その中で、各エリアコーディネーターは、地元のネットワークをもちいてエリア内の関係者を巻き込み、ツアーの協力体制を築き、調整をしながら、ツアープログラムを開発する主体として位置づけられ、プログラム形成期では事務局とともにツアープログラムを開発した。

次に、ツアープログラムの内容を把握した。ツアープログラムにおいて、対象となる観光資源についてツアーマップから把握し、観光資源の分析を行った。その結果、OSAKA 旅めがねでは観光資源として、飲食・物販などの商店、歴史関連資源、自然・土木・建築物による空間構成要素を扱っており、歴史や食べ歩きに偏ることなく、まちの資源を扱っていることがわかった。また、ツアー行動においては、各エリアのツアーで地域の人物紹介、試食、クルーズなど、多様なアクティビティが含まれている観光形態であることが把握できた。

○ツアープログラム形成過程におけるエリアコーディネーターの果たした役割

エリアコーディネーターへのヒアリング調査により、各エリアでのツアープログラムの形成過程を把握した。エリアクルーの事業以前のエリアとのかかわり方、形成過程において重要視された要因から形成過程を３パターンに分類した。自立型事業を目指す着地型観光において、エリアコーディネーターの視点は、エリアコーディネーター自身の地域に対する視点、地域のまちづくり活動において地域と共有されてきた視点、観光事業者として来街者を意識した視点を持つことがわかった。その中で、エリアコーディネーターは地域での活動を着地型観光を通じて広める意図をツアープログラムに反映させている一方、ツアーの評価によっては来街者を意識したプログラムへ変更する例が見られ、地域内でツアーが地域に寄与する視点と対外的なツアーの評価の両方の視点を持ち、関係を調整する役割があったといえる。

以上のことから、地域に寄与し、観光商品として価値のあるものを生み出すうえでは、地域内外の視点を持った着地型観光づくりの形成が重要であると考える。

【補注】

（1）２００９年８月２２日～１０月１２日にわたって大阪の水辺の魅力を創出・発信することを目的に開催された事業である。多くの市民団体、ボランティアが参加し、一過性のイベントではなく、継続するムーブメントとして事業が継続することが目指された。Ｃ＆Ｗ事業の他、舟運プログラム、アート事業、社会実験による水辺空間利用、市民企画などのプログラムから成る。

（2）国土交通省による定義に基づく。

（3）森重ら[3]による観光を活用した地域づくりのプロセスおよび、敷田ら[4]によると、エコツーリズムの推進プロセスを参考にした。いずれにせよ着地型観光づくりでは地域の関係者が組織をつくって連携や協働するネットワークづくりと地域資源を観光プログラム化する過程が必要となる。

【参考文献】

1）西江幸久 (2005)『都心近接の密集市街地における地域内外居住者にとっての魅力資源とその共有化に関する研究－大阪市福島区野田地域における協働まちづくりを展望して－』大阪市立大学大学院修士論文

2）今井亮輔・中井検裕・中西正彦 (2004)『観光ボランティアガイドによる観光ルートの設定に関する研究 －横浜シティガイド協会を対象として －』日本都市計画学会学術研究論文集 39－ 3 号 pp 223-228

3）森重昌之『観光を活用した地域内外の関係性構築とそのプロセスに関する研究 －北海道標津町における観光を活用した地域づくりプロセスの分析 －』日本都市計画学会学術研究論文集 43－ 3 号 pp 289-294

4）敷田麻実 編著「地域からのエコツーリズム 観光・交流による持続可能な地域づくり p.161 」学芸出版社（ 2008）

討議等

◆討議１［内田　准教授］

研究の方法を示してほしい。具体的にどのような手段で把握したのか。そもそも、研究対象事例と筆者はどのような関係か、研究者として研究対象とどう向き合っているのか。

◆回答：研究の方法については、ＯＳＡＫＡ旅めがねが発行するツアーマップ及びエリアコーディネーターへのヒアリングにより、観光資源とツアー行動を把握した。
私自身はイベントなどを通じてＯＳＡＫＡ旅めがねに関わりがあるが、ツアープログラム作成に直接関わったわけではなく、その事について明記しておく必要があると考える。

◆討議２［内田　准教授］

形成過程について３つのパターンの違いと特徴を聞きたい。また、図の中でプロセスはどこに表現されるか。

◆回答：パターンＡは、エリアコーディネーターと地域のかかわり方、活動が基盤となって観光資源が設定される。パターンＢは対外的なエリアのイメージを利用してプログラムが作られる。パターンＣはエリアコーディネーター自身のエリアに対する興味・関心が強く表れている。図中ではプログラム形成のプロセスの中で最も影響が大きかった要素を表している。

◆討議３［倉方准教授］

３パターンの図は形成過程ではないと思う。なぜエリアコーディネーターに着目したのか。対象がおもしろいので、着地型観光が従来の観光に比べてどういう風に地域の見方が違うのか、資源の掘り起こし方が違いを示すことがあってよかったのではないか。

◆回答：ツアープログラムの作成までがエリアコーディネーターの主な役割である。エリアコーディネーター自身の地域への関心や、地域で行っていた活動がプログラムの内容に大きく影響を与えため、形成過程において着目することとした。着地型観光と地域の関係を幅広く見る視点は今後の研究課題であると考える。